



水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十五号

2023/05/29 発行

題字：高橋弘美

ご挨拶

五月は一年の中で一番美しい季節だ。風はさわやかだし、空気はうまいしからりと乾いていて、日差しは明るくて暖かく、空は真っ青でとにかく陽気である。一年の中で、この時期の緑がもっとも美しいように思う。この時期には、緑はみな青々と輝いて見える。これでもう少し空気中の湿度が上がってしまうと、どうも彩度が欠けてきて、みずみずしい純粋な輝きが失われてしまうように感じる。

最近、黄色と青とを混ぜると緑色ができるということを知ったが、これを知ったときはちょっと感動した。つまり緑色とは、日差しの色と空の色とを混ぜあわせた色なのだ。だから緑は五月に美しいのだ。青々とした空と明るい日差しのもとに、萌え出る緑が生まれる。あたりの田植えももうあらかた終わって、いまは大地の隅々までが緑である。青空のもとで呼吸するとき、わたしは緑を吸っているのだと思う。こんな幸福な時期は梅雨の訪れとともにもうすぐ終わってしまうのだが、いましばらくは青と黄色の下で、色とりどりの緑を眺めていたいと思う。

今号の内容

山と里とのあいだ

後記に代えて

山と里とのあいだ

家から南へ五分も歩くと山である。山の手前には川が流れている。川の兩岸は土手に囲まれていて、都会ならいい散歩道になるところだが、この土手は一応平らにされて砂利など敷かれているものの、誰も手入れをしないので、六月にもなるともう背の高い草に覆われてしまっても歩けなくなる。整備したところでせいぜい犬の散歩に何人か歩くくらいで、費用をかけるあてもないのだろう。

うちからこの山までは、まっすぐな農道が通っている。あたりは田んぼしかなく、高いものといえれば山よりほかないから、とにかくその山めがけて一直線に歩いて行くような感じになる。農道の両脇にはシロツメクサやハルジオン、踊子草などが咲いている。田植え前のこの時期には、田んぼに水が張られていて、その中を歩いていると水の中を歩いているような気になる。水は鏡のように空を映している。道のシロツメクサもハルジオンも映りこんで揺れている。ツバメが身を翻しながら飛んでいくのも水

の面に映りこみ、あわてて空を見上げるとツバメはもうはるか向こうを飛んでいる。遠くにサギがいて、こっちの様子をじっとうかがっているのがわかる。水の中を、わたしはまっすぐに山めがけて歩く。山へ向かうのはとてもいいものだ。こっちが近づいて行くと、山は親しげに呼んでいるように見える。「こっちだこっちだ。こっちへ来い」

山肌を覆う杉は手を振るように揺れている。

「おい、帰って来いよ」

それでわたしはいま行くよと云いながら、ときどき足もとの砂利に足を取られつつ、大急ぎで歩いていく。サギはわたしがとづくに通り返すのに、相変わらずじっとその場に立って、油断なくこちらを見張っている。わたしの歩幅は大きくなり、山はぐんぐん近づいてくる。ぼんやりした緑の塊だったものが、一本一本の木に見えるはじめる。杉の木にからみついて垂れ下がった藤のあやしい紫は、男に絡みついて離れない女みたいである。それが紫の袖を振るみたいに揺れている。

「おい、早く来いよ」

わたしはふうふう云いながらいまや川辺にたどりつき、土手に登ろうとしている。勢いをつけて飛び上がり、二歩、三歩と駆け上がる。少し先に階段があるが、そこまで行くのは回り道だ。わたしはまだ土手をスニーカーで駆け上がることができる。子どものように。

土手の上に登ってしまおうと、もう山は目の前である。眼下に川が流れている。川の向こう岸にも同じような土手があり、そのすぐ先はもう山の斜面だ。斜めに生えた木、大きなうちわのような葉を茂らせた木、真っ赤な花を咲かせた木、白い小さな花をいっぱい咲かせている木、そうしたものが向こう岸に見えてくる。

川はさらさら、とうとうと、音を立てて流れている。少し先にカモが二羽泳いでいる。いつもこのあたりにいるのだ。ちよつと離れた木の上には山鳩の夫婦も隠れている。カラスはどこにでもいる。ウグイスが鳴いている。この時期だと、トビの赤ん坊が孵っているだろう。山にはカモシカがいて、クマがいる。見たこともないような色の花があり、山菜があり、キノコがあり、そのほか多くのものがこの山の中に眠っている。この土手を降りて川を渡ればわたしは山へ行ける。だがしかし、そこでわたしの足は止まり、すくんでしまう。

山の人間だから、わたしは海が怖い。金を積まれても、できれば海には近づきたくないと思う。海に対する怖さはなにか得体の知れない怖さだが、しかし山に対する怖さは、向こうの正体を知っているゆえに生まれる怖さに似ている。山の近くに住む人の中には、山菜採りの好きな人というのが必ずいる。うちの親戚にも何人かいて、四月になると待ちわびていたように山に入り、山菜をどっさり採ってくる。

そしてそれをうちにも分けてくれる。だが山菜の風味をわたしは好かない。それはなにか刺すような、あまりにも生々しい山の気を帯びていて、山の霊気を吸ってこの世に生えてきたために、山の霊の味がする。青く鋭く荒々しく、ごうごうと吹く風の荒々しさに青をたらし込んだような味が渦巻いている。それでわたしはひと口食べるともう吐き出したくなってしまう。コゴミ、タラの芽、コシアブラ、ウライ……山菜は形も見慣れた野菜とはどこか違っていている。それらは皆異形である。

同じように、山際に生えている草木もすでに異形のものなのである。ヤツデをもっと大きくしたようないびつな葉が、奥のほうでゆらゆら揺れていて、変なツタがあたりの木々にむやみからまり、野生の藤は薄気味の悪い紫色で木を窒息させにかかっているように見える。それらはみんなあの山菜と同じ、あの山の気の中から生まれてきたものなのである。遠くからはあんなにきれいに見えたのに、いまはなんと里のものと同じに見えることだろう。なんとわたしと違った出自のものであることだろう。そこでわたしは怖くなり、もうこれ以上山のほうへ行こうなどとは思わなくなる。山の手前に川があつてよかつた、ともかくもこれが境界線なのだからきつとこの川を越えては、山の気も流れ出ては来られないだろう。山はわたしの見慣れたものと違う。山はわたしの場所ではない。わたしはこの川の向こ

うのものではないのだ。
わたしはそう思い、もうこれ以上向こうへは行かないで、土手の上を歩き出す。

「来ないのか」
「来ないのか」
「入って来いよ」

と木々はゆらゆら揺れながらわたしを誘うが、わたしは無視してずんずん土手の上を歩いていく。

「おまえを知っているんだぞ」
「おれたちのほうがよく知っているんだぞ」
「おまえはおれたちの仲間なんだぞ」

と連中は云うのだが、わたしはやつぱり土手から向こうへ行こうとしないで、ずんずん先へ歩いていく。

しばらく行くと、川に渡された橋が見えてくる。黒いプレートに「ななしばし」と彫ってあるから、名前のない橋なのだろうとわたしは思っていた。誰がこんなところを渡るのか知らないが、つい最近できた橋のようである。ぴかぴかの巨大なボルトが何本も刺さっていて、橋の名前を彫ったプレートも新しい。そもそもこの川の工事が終わったのはつい最近のことなのだ。何年か前まで、夏に実家に帰省すると、川のあたりにたくさんの重機が並んでいて、さかんになかやわやわしているのが見えた。

この真新しい橋を渡ると川の向こうへ行くことができるが、わたしは一度も渡りきったことがなかつ

た。橋の真ん中あたりまでなら行ったことがある。そして橋の欄干にもたれて、川を見下ろしたことが。そこから川の流れを見ると、川はゆるやかに蛇行しながらぴかぴか光って流れていて、ああこれはみごとな龍だと思う。ここに龍が寝ていて、嵐になると起きてくる。雷を浴びるとこいつは機嫌がよくなり、雨が横殴りにざあざあ降ってこようなものなら、もう欣喜雀躍して、空へ躍り上がるのである。ここには立派な龍が寝ている。この山と里との境界に。

ところがこの日、わたしはなぜかその「ななしばし」を渡りきった。なんとなくそんな気になったとしか云いようがないが、ともかく、少し弓なりになった「ななしばし」の真ん中を過ぎると、欄干の下の方に別のプレートがとりつけてあって、それには「七志橋」と漢字で書いてある。するとこれは名無しなどではなくて、「ななし」というれっきとした名前だったわけである。それを名無しの権兵衛と思ひこむとは、なんだか橋にすまないことをしたと思つた。そんなことを思っているうちに、橋を渡りきってしまった。

もとより二十歩も歩けば渡ってしまうような短い橋である。それをこんなに長いあいだ渡らなかつたとは妙なもののだが、人とはそもそもずいぶん奇妙なものではないか。ふるさとの山に向かつてはなんにも云うことはないと思んだ人がいたが、わたしだつてそう思う。ふるさとの山というのはありがたいも

のである。山のそばに生まれると、山そのものがふるさとであるということがよくわかる。人間の魂は山で生まれた。われわれの魂のふるさととは山なのだ。だからわたしは山に憧れ、いつも山に帰りたいような気がする。山に向かつてゆくときは、子どもが一目散に母親のところへ駆けてゆくような、なにかたとえようもないような気持ちがある。わたしはこんなに山が好きだ、しかし山の手前まで来るともう怖くなって、身がすくんでしまう。わたしの身は、こんなところ自分のいる場所じゃないとぶるぶる震えながら云う。わたしの心は山を求めているのだが、体は早く帰ろうという。

わたしはなぜ七志橋を渡ったか？ いまやわたしは反対側の、山のすぐそばの土手に立っている。そこはもう土手などろくに形成されていなくて、すぐに山の斜面である。赤茶けた土が見え、斜面に沿って植物がびっしり生い茂っているのが見える。いつだか、この斜面を駆け上がってゆくカモシカを見た。引き締まった尻を揺らしながら、カモシカは一目散に田んぼを駆けぬけて山へ帰っていった。わたしはそのカモシカが愛おしかった。あの山でこんな大きな獣が育つとは誇らしかった。一目散に山へ逃げ帰るカモシカは、これらの気色の悪い植物をかき分け踏みわけて、きつとすみかへ帰ったろう。そうしてはじめて安堵のため息をつき、沢へでも水を飲みに行きたらう。

わたしはいまやその斜面の前に立っている。山からひんやりとした空気が下りてくる。そこに山の霊気がこもっているのをわたしはもう感じる。山の周りは温度さえも里とは違っている。なにか冷え冷えと湿っていて、少しも親しみが伝わってこないようなのだ。

わたしはもう先へ進まずに、このまま戻ることにした。しばらく歩けば、また別の橋に出る。その橋はそのまま山の中につけられた道へと続いていて、その道をとって山を越えれば隣町へ行ける。くねくね曲がりくねった、細くて鬱蒼として怖いような道である。このまま歩いていけば、その山道に続く橋の上に出られるのではないかと思った。

冷え冷えとした空気を体の左側に感じながら、しばらく歩いた。風が木々の葉をざわざわと揺らし、気味の悪い白い花がゆらゆら揺れていた。わたしはもう怖くなり、不安になってきて、こんなばかげた冒険をはじめてしまったことを後悔していた。

「おい帰るのか」
「帰るのか」

「おれのこの枝をつかめよ、引っぱってやるから」
わたしはそうした声を無視してずんずん歩く。ほどこく問題の橋に出たが、ここへ来てわたしはなんだか絶望的な気持ちに襲われた。というのも、その橋というのはわたしのいま歩いてきた土手より四、五メートルは高いところに渡されていて、そこへた

どり着くには山の斜面をよじ上るよりほか、どうしようもなかったからである。

斜面は急だった。橋は無情にもはるか上にかかっていて、いま一台の車が橋の上を通り過ぎた。こんなところで途方に暮れているバカがいるとは、その車に乗っている人も思うまい。第一こんな冒険は、子どもがやるならいざ知らず、もう四十にもなるという人間が面白がってやるには、少しばかばかしすぎることに思われる。だがどうしようもない。いまさら来た道を引き返すような気力はなかった。山の霊気が冷え冷えと吹きつけてくるのにもう耐えられない気がしたし、一刻も早く里へ出たかった。一刻も早く里へ出て、美しく水をたたえた田んぼを見、それが日差しを浴びて誇らしげに輝くのを見たかった。

わたしは斜面を登りだした。土は崩れやすく、茶色く枯れた杉の葉っぱがあたり一面に散らばっていて滑りやすかった。最初に体を支えるためにつかんだ枝は枯れ枝だった。これならばと思っただけで枝も、するりと地面から抜けてしまったりした。わたしはあえぎながら、斜面に手をつき、必死になって登った。額に木の枝がぶつかった。蜘蛛の巣にまともに顔をつっこんだ。驚いた女郎蜘蛛が逃げていった。この薄気味の悪い、黄色と黒のしましまめ！ わたしは蜘蛛の巣を払いのけようと顔の前でめちやくちやに手を振りまわしながら、声を出さ

ずに罵った。小学校の裏山でも、わたしはこいつにいじめられたことがある。女郎蜘蛛の巣は一メートルを超える。あんまりでかい巣を作るものだから、わたしのような愚図はどうしても体のどこかを引っこんでしまうのである。そのときも女郎蜘蛛のやつは赤い腹を見せながらすうつと後ろへ引いていた。赤い唇の女が笑っているみたいだった。

わたしは無我夢中で登った。どうやったのかまるでわからないが、とにかく気がついたらわたしは橋の上に出ていた。車がまた一台、わたしのそばを走って山の中へ走っていった。

時間にしたら、おそらく五分もかからなかったろう。だがわたしはほとんど永遠に近い時間を格闘して過ごしたような気がした。そしてしばらく自分がどこにいるのかよくわからなかった。自分がどんななりをしているかもよくわからなかった。わたしは山のものだから里のものだから、自分でもよくわからなかった。

だが橋から里を見下ろすと、なんとそこは広々と開けていたことだろう！あたりは一面田んぼだった。沢から引いてきた水をなみなみとたたえて、大地は輝いていた。どこもかしこも平らで、道路はまっすぐに伸び、人家はこんもりした木に囲まれ守られていた。柿の木の上にカラスがとまっていた。はるか向こうの丘の上に、祖母が入っていた施設が見えた。

わたしはどつと安堵を感じて、橋を渡って歩き出した。里のほうへ、家のほうへ、わたしは歩き出した。橋を降りてしばらく歩き、左へ折れて田んぼのあいだの農道に入ると、もうあとまっすぐに家に向かうことができる。しばらく行くと左手に人家が見えてくる。集落の一番端の家である。家の前にある畑を、家のじいさんが鋤でもって耕していた。それを見たとき、わたしはようやく人心地がついて、

ちゃんと戻ってきたと思った。が、同時にわたしの姿が、なにか異形のものに変わってはいはないかと恐れた。あの斜面での格闘のあいだに、わたしの姿は変わってしまったのではないか、たとえばコゴミのように。コゴミという山菜は、ワラビのように茎の先端がくるりと巻いているのだが、その巻きの中にみっちり、羽のような形をした細かな葉っぱがつまっている。そのみっちりつまつたふさふさした葉を見ると、わたしはわけもなくぞつとするような気がする。あれは異様な植物である。

そのコゴミの羽のような葉が、わたしの顔や体にも密集してはいないか。そしてそれがわたしをして人間ならざる山のものにしてはいないか。わたしの見た目はもう山のものになっていないか。というのも、あの冒険のさなかに、わたしはどうも自分の魂の一部を山へ落としてしまったような気がするのだ。あの斜面のどこかで、わたしの魂の一部が耐えきれず転がり落ちていった気がするのだ。どう

もそんな気がしてならない。わたしはあすこへなにかを落としてきてしまった。

だが畑の中にいたじいさんは、わたしを見ると軽く頭を下げた。わたしも軽く頭を下げた。そしてその家の前を過ぎて、わたしはもう集落の中へ入っていた。とすると、わたしは正しく人間の姿をしていた。らしい。だがどうしてもそれが信じられなかった。あのじいさん、歳をとって目が悪いから見えなかったのではないか。コゴミの葉っぱみたいなのが絶対にどこかに生えてしまっているに違いない。それがひげのように、こけのように、わたしの皮を覆っている……

蜘蛛の巣をまともにかぶつたし、全身汚れているような気がして、家に帰るとすぐに風呂に入ったが、湯船につかりながら、たしか前にもこんなことがあったと思った。あれは小学一年生のときのことである。学校のそばの横断歩道で、わたしは車に轢かれかけたことがある。さいわい車が急停車して、どうにか間に合ってくれたからよかったものの、あのときもわたしは魂の一部をあつたりへ落つことした。わたしは物理的には死ななかったのだが、魂としては確かにあのとき一度止まって死んだので、その死んだ感触をわたしは思い出したのである。

小学校は山をひとつ越えたところにあつたので、行き帰りには山の中を通った。整備された道路を少し外れると、もうむき出しの山の中であつた。事故

に遭う少し前、学校の帰り道に、わたしは山の中へ入って、山に生えているアケビを食べた。あれもまた紫色のさやをもった、なんだか気味が悪いような食べ物であるが、それを見つけたとき、紫色のさやはぱっかり開いていて、中から白い果肉と黒い種がのぞいていた。一緒にいた男の子が、これは食べられるし結構うまいのだというので、わたしは興味本位でそれをもいで食べたのである。そのしばらくあとに事故に遭ったわけだが、だいぶたってから、あれはあのアケビのせいだったと気がついた。

山へ近づくと、わたしは死に近づく。その境界をわたしはあまり意識しない子どもだった。死への境界は、わたしにとってなにかそこらじゅうに口を開けているというふうなもので、わたしは気がつくといつもそっちへ行きそうになった。そうしたことがおぼろげにわかっていたのはあの事故のあとである。あのときわたしは死というものがあるふうに見える姿で自分を襲ってくるのかを見た。そしてそれを怖がることを学んだが、あの子どもの手ほどの大きさをした紫色のアケビを食べたことで、わたしはあの事故の体験を呼びよせたのに違いない。

山へ行くことはどうもやはり死ぬことだ。山へ近づくと死へ近づくことである。山から戻ってくることは、だから死んで復活することなのだろう。山と関わり、魂をふり落とすたびに自分にながらぎるのか、わたしは知らない。このたびの冒険がな

に意味するのか、なにをわたしは落としたのか、あるいはなにからよみがえったのか、わたしは少しも知らない。こんなことを考えること自体、ひどく時代錯誤なことであるのかもしれない。しかし山から戻ってきたときに見た、あの里の美しさ！あの瞬間に、わたしは人間の偉大さを、人間に文明をもたらした火と鉄との偉大さを思った。人の文明はみんなそこから生まれた。そしてわたしたちは光を求め、太陽の子だ。日の下で働き、日の下で栄え、日のもとに自分の領土を拡大してゆく生き物だ。山と森とは駆逐される運命にあり、川は鎮められ、海は乗り越えられる。わたしは紛う方なき里の生き物だ。山へゆくのは、わたしの体がいいよ尽きて、霊となったときである。

後記に代えて

祖母の葬儀からこっち、気づいたら三キロ以上太っていた。体重計に乗るのを極力避けているので、体重の増加にはあんまり気がつかないほうだが、こないだとうとうヨガの最中に、どうも腹回りが邪魔なことになって体重計に乗ったら、そういうありさまだった。

冠婚葬祭のなかでも葬には度重なる宴会がつきま

とう。葬式一回きりで終わらないのが葬であって、やれ誰か来たの五十日だの百日だのと、終わったあともなにかしらある。そのなにかのたびに調子に乗ってビールを五リットルも飲み、宴会用のオードブルだのなんだのを食べていたら、まあ栄養は偏るし酒のせいでカロリーはとり過ぎるしで、太るに決まっているわけである。ビールの五百缶を十本もペロペロ飲むのは個人的には幸福なことこの上ないが、それが体にとって幸福であるかどうかはまるで別の問題である。

ともかくも、わたしはこの三キロの脂肪というやつを放っておくかどうかするかの決断を迫られたわけである。結局、ダイエットを決意したわけだが、こいつは心身上の一大問題であって、ただこの一事でもっておのれというものの恥部や恥辱や暗闇や生傷なんかがある存在を主張しはじめるわけである。ダイエットというのはそういう作業である。そういう一大事業であり、ある種の人間にとっては最難事である。だがこの三キロの脂肪を祖母の置き土産と思つてとり組めなければわたしは人でなしである。来月はそのへんのことについてご報告できるかもしれない。

二〇二三年五月二十九日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>